Japanese Psychological Review
2018, Vol. 61, No. 3, 404–406

知恵の生涯発達へのアプローチ
―春日・佐藤・Takahashi 論文へのコメント―

楠　見　　孝
京都大学

1. はじめに

春日・佐藤・Takahashi（2018）による論文「知恵は発達するか：成人後期における知恵の機能的側面と構造的側面の検討」は，知恵（wisdom）の生涯発達に関する先行研究を展望した貴重な論考である。論文では，第一に，先行研究を踏まえた上で，「知恵」の定義を試みている。その概念に関する統一的な見解を導くことは難しいことを指摘した上で，「知恵」を包括的に解釈する必要を論じている。そして，「機能的側面」と「構造的側面」という2つの観点を提起している。この観点に基づいて，第二に，知恵の測定に関する先行研究を展望し，これらが知恵の量を測定するものであることを示している。第三に，知恵の発達における非連続的な特徴を，第四に，心理的要素の加齢変化について論じている。これらは，今後，日本において，知恵に関する研究を進める上で，重要な定義，方法論，そして人生後期の発達的変化に関わる成果を明確化したものである。

評者は，実践知の獲得の点から知恵の測定に関心をもち，海外の主な尺度を翻訳した上で，尺度開発研究を進めてきた。その一部は本号における楠見（2018）として掲載されている。本論文は，そうした尺度開発研究のための土台ともなる研究である。2からは，それぞれのトピックに分けて論じていく。

2. Wisdomの訳語と概念の問題

春日ら論文では，「はじめに」において，wisdomの訳語について，多くの日本の先行研究と辞書の定義を引用しながら議論している。そして，「英知（叡智）を含む，より上位の概念である「知恵」という訳語を使用する」としている。

評者は，wisdomの訳語は，論文などにおいては専門用語としては限定された概念である「叡智」，参加者に評定や面接を行うときには，日常語であり一般的な概念である「知恵」をあわせて説明に使うことが適切と考える。その理由は，春日ら論文におけるwisdomの定義「人生経験を積み重ねるとともに培われる」，「成人期以降に発達し得るが，必ずしも全ての人が至るわけではない特徴」という生涯発達を重視した内容を示す語は，「知恵」よりも，限定的な概念「叡智（英知）」の方が対応しているためである。さらに，日常語でもある「知恵」という訳語を採用することは，「生活の知恵」のような「日常生活のちょっとした工夫」までを含めることになり，wisdomの中核的意味からズレが生じるためである。

ここで，「知恵」と「智慧」，「英知」と「叡智（叡知）」は，読みは同じであっても，用いる漢字の意味や使用頻度によって，異なる印象を与える。本特集号名「叡智とはなにか」に用いられている「叡智」は，漢字の意味では，「叡」（深く明らか）と「智」（理解し判断する力，知恵）からなる。「英」（すぐれた）と「知」の組み合わせよりもwisdomに近いと考える。なお，春日ら論文でも言及しているように，「慧」は仏教の悟りを得ることに使われる点でwisdomの中核的意味とずれると考える。

Wisdomの定義に関わる春日ら論文の重要な貢献は，表1において，最近の主要な研究の20の定義を示した上で，2つの側面から統一的に捉えた点である。春日らは，Takahashi and Overton（2005）の提案した「包括的知恵理論」をもとに，wisdom概念をつぎの2つに分類している。ここでは，「分析的側面」を「機能的側面」，一方「総合的側面」を「構造的側面」として再定義している。これは，「構造的側面」が「機能的側面」を下支え

している関係を明示する利点があるとしている。

評者は，wisdom 概念には多面性があるが，中核的要素と周辺的要素があると考える。これは認知心理学のカテゴリ研究に基づく考え方である。春日ら論文の 20 の定義に使われている共通する「キイワード」に基づいて，中核的要素を抽出することもできると考える。たとえば，「人生」についての「すぐれた」認知的・非認知（態度）的「能力」が「バランス」を取りつつ行動を導き，「知識」「スキル」，「経験」などとともに「統合」されていることが中核的要素であると考える。

3. 知恵の測定方法

知恵の測定は難しく，この分野の研究において，重要なトピックである。春日ら論文では，知恵の機能的側面は，ベルリンパラダイムなどのパフォーマンス（客観）評価で測定され，構造的側面は質問紙（自己）評定で測定されると位置づけて，統一的に整理をしている。さらにこれらの知恵の評価は「知恵の有無ではなく，知恵の量」を評価する連続的なものであることを指摘している。その上で，「発達」の節では，質的な差異について言及している。ここでは，主要な 3 つの方法を採り上げて議論する。

第一は，春日ら論文では，Baltes らのベルリンパラダイムは，知恵を支える知識や能力に焦点があてられ（Webster, 2003），感情側面を無視しているとの指摘（Ardelt, 1997）がされている。さらに，このパラダイムを発展させたブレーメン個人的知恵測定法（Mickler & Staudinger, 2008）を紹介し，一般的知恵ではなく，自分自身の人生を洞察する個人的知恵に焦点をあてるという新たな観点と，両者を分けることについての批判（Takahashi & Overton, 2005 等）を論じている。

日本ではベルリンパラダイムは，日本語版（高山ら，2000）が作成され，日本の研究者にも知られている。ブレーメン個人的測定法は，ベルリンパラダイムで測定されているものを一般的知恵として，それとは別の個人的知恵を測定しようとしている点に特徴がある。ただし，Takahashi and Overton（2005 等）の指摘に関連するが，膨大な情報を手軽に検索できる時代における，一般的知恵と個人的知恵の区分への有効性については議論がある。評者は知識とエピソード記憶との関係のように，両者は操作的には分離して定義でき，両者がどのように相互に関連しているかの解明が重要と考える。

第二は，自己評定式知恵尺度である。春日ら論文では主要な 3 尺度である Webster（2003）の自記式知恵尺度（SAWS），Ardelt（2003）の 3 次元知恵尺度（3D-WS），Levenson et al.（2005）の成人用自己超越尺度（ASTI）を取り上げ，尺度の特徴と研究の展開が論じられている。これは，尺度研究を進めるうえで貴重な情報である。これらの 3 尺度の日本語版と 3 尺度に基づく短縮版（BWSS; Glück et al., 2013）は，楠見（2018）の付録で掲載している。なお，Glück らは 3 尺度間の相関データも示している。楠見（2018）も，ほぼ同様の相関を得ている。とくに，下位尺度間の相関は，下位尺度間の類似度に依存していると解釈できる。

なお，春日ら論文では，状況的賢明な推論尺度（Brienza et al., 2017）というインタビュー方式のパフォーマンス評価を，自己評定質問紙にした尺度を紹介している。楠見（2018）においても，ベルリンパラダイムの評価基準を自己評定質問紙にした叡智知識尺度（WKS）によって，測定実施のコストを下げる試みを実施している。こうした知恵についての各方法論の利点を活かした多角的なアプローチが必要と考える。

4. 知恵発達のメカニズム

春日ら論文では，知恵は，人生の遅い時期に高まる点を指摘した上で，そうした変化の仕組みと様相について，論じている。

第一に，知恵の発達的変化の仕組みとしては，ライフイベントの経験の仕方や態度が重視であることを指摘している。これは，楠見（2014）においても実践知の獲得の重要な要因として位置づけられている。第二に，心理構造の発達としては，認知的発達と感情的発達の相互作用を重視している。

様相については，知恵は生涯を通じて高まるかどうかという問いがある。ベルリンパラダイムでは内外の研究において知恵スコアの有意な年齢変化が見られていない（ただし，Baltes らは上位 20% は高齢者が多いという指摘もしている）。ま

た，西欧の研究における前述の3尺度（SAWS, 3D-WS, ASTI）のスコアは中年期に上昇してから停滞あるいは，下降するパターンが得られている。一方，楠見（2018）においては，これらの知恵の尺度スコア，開放性，好奇心などの加齢による上昇が見られている。最晩年での低下が見られないのは，インターネットを利用できる高齢者サンプルということを考慮する必要がある。加齢による知恵の変化について，複数の指標，サンプルを用いたさらなる検討が必要と考える。

5. 結　　論

春日ら論文を踏まえたWisdomの生涯発達に関する今後の課題としては，以下の5点がある。

第一に，辞書的な検討を踏まえた上で，Sternberg（1985）などの方法を用いて，幅広い年代の日本人を対象として複数の訳語を用いた概念を比較する研究をおこないwisdomに近い意味の訳語を同定することである。

第二に，wisdom概念の文化差を解明し，日本文化におけるwisdom概念と文化普遍的なwisdom概念を解明することである。ここでは，中核的意味と周辺的意味の区別も必要と考える。同様の研究は，ノスタルジア概念の14カ国の比較文化研究が行われている（Hepper et al., 2014）。

第三は，海外の先行研究の測定法を踏まえ，日本の文化を考慮に入れた知恵を測定する方法を開発することである。楠見（2018）は主要な3尺度の翻訳や新尺度を示しているので，それを外的基準として検討することも考えられる。

第四は，第三で開発した方法を用いて，生涯発達研究をおこない海外の研究との比較研究を行うことである。ここでは，知恵の発達の文化普遍的と文化特殊的な部分を解明することが重要である。

第五は，生涯発達的変化の解明である。春日ら論文では，成人後期の発達的変化について5つの理論を示していた。こうした知恵の発達に影響する要因には，多くの要因が影響すると考えられる。Baltes and Smith（2008）（楠見2018，図1参照）のような複数の要因からなるモデルを立てて，複数の指標（パフォーマンス課題と自己評定）を測定する縦断，横断研究を行うことが考えられる。

引 用 文 献

Ardelt, M. (1997). Wisdom and life satisfaction in old age. *Journal of Gerontology*, *52*, 15–27.

Ardelt, M. (2003). Empirical assessment of a three-dimensional wisdom scale. *Research on Aging*, *25*, 275–324.

Baltes, P. B., & Smith, J. (2008). The fascination of wisdom: Its nature, ontogeny, and function. *Perspectives on Psychological Science*, *3*, 56–64.

Brienza, J. P., Kung, F., Santos, H. C., Bobocel, D. R., & Grossmann, I. (2017). Wisdom, bias, and balance: Toward a process-sensitive measurement of wisdom-related cognition. *Journal of Personality and Social Psychology*, Advance online publication. doi: 10.1037/pspp0000171

Glück, J., König, S., Naschenweng, K., Redzanowski, U., Dorner-Hörig, L., Straßer, I., & Wiedermann, W. (2013). How to measure wisdom: Content, reliability, and validity of five measures. *Frontiers in Psychology*, *4*, 405.

Hepper, E. G., Wildschut, T., Sedikides, C., Ritchie, T. D., Yung, Y., Hansen, N., ... Zhou, X. (2014). Pancultural nostalgia: prototypical conceptions across cultures, *Emotion*, *14*, 733–747.

春日彩花・佐藤眞一，Takahashi, M.（2018）知恵は発達するか：成人後期における知恵の機能的側面と構造的側面の検討　心理学評論，*61,*384-403..

楠見 孝（2014）ホワイトカラーの熟達化を支える実践知の獲得　組織科学，*48*, 6–15.

楠見 孝（2018）熟達化としての叡智 : 叡智知識尺度の開発と適用　心理学評論，*61,* 251-267.

Levenson, M. R., Jennings, P. A., Aldwin, C. M., & Shiraishi, R. W. (2005). Self-transcendence: Conceptualization and measurement. *The International Journal of Aging and Human Development*, *60*, 127–143.

Mickler, C., & Staudinger, U. M. (2008). Personal wisdom: Validation and age-related differences of a performance measure. *Psychology and Aging*, *23*, 787–799.

Sternberg, R. J. (1985). Implicit theories of intelligence, creativity, and wisdom. *Journal of Personality and Social Psychology*, *49*, 607–627.

Takahashi, M., & Overton, W. F. (2005). Cultural foundations of wisdom: An integrated developmental approach. In Sternberg, R. J. & Jordan, J. (Eds.), *A Handbook of wisdom: Psychological perspectives* (pp. 32–60). New York: Cambridge University Press.

高山 緑・下仲順子・中里克治・権藤恭之（2000）知恵の測定法の日本語版に関する信頼性と妥当性の検討：Baltesの人生計画課題と人生回顧課題を用いて性格心理学研究，*9*, 22–35.

Webster, J. D. (2003). An exploratory analysis of a self-assessed wisdom scale. *Journal of Adult Development*, *10*, 13–22.

― 2018. 11. 7　受理 ―